

文献紹介

安藤喜代美 (著)

現代家族における墓制と葬送

——その構造とメンタリティの変容——

2013 年, 学術出版会, ISBN 978-4-284-10375-6, 定価 (3,200 円+税)

金 沢 佳 子

本書は、墓制や葬送儀礼の変化を現代家族の変動と関連づけ、構造や機能だけではなく、家族成員に共有されてきたメンタリティに照射した考察分析である。墓祭祀は、日本型「近代家族」のメンタリティの行く末を探ることに通じるとして、「近代家族」論の俎上に、もうひとつの要素として「祖先崇拜」を取り上げた。

第 1 章「日本における近代家族の登場と変動」では、歴史人口学と心性史を参照しつつ、明治期に形成された近代家族の特徴と戦後家族の特徴を独自の見解で整理しなおす。第 2 章「戦後家族の変動と墓制の変遷」では、新しい墓制（散骨、樹木葬、ロッカー式納骨、合祀廟などの非継承形態）選択に内在するメンタリティに切り込んでいく。墓制選択の中心は 1925～50 年生まれの「多産少死」世代である。それ以降は「少産少死」世代となるが、この世代は 1970 年代中葉には子どもを有し、二世帯構成となる。高度経済成長期以降に墓を買い求めた人々は、核家族を営みながらも規範のなかでは直系家族を生きており、墓はイエ要素を含むメンタリティとともに存続してきた。よって、新しい墓制が当たり前のこととして定着したときこそ、日本の直系制家族が終焉のときを迎えたといえるとして、墓制意識に関する調査を開始する。第 3 章から第 7 章は、2006 年から 09 年における M 大学の学生・卒業生・教職員ならびに周辺地域の人々に実施した墓制意識に関するアンケート調査の精察である。「地域性とお墓に対する意識」、「団塊の世代における墓制の選択」、「女性からみる墓制のあり方」、「世代間による継承意識の比較」、「墓制観における男女の比較」と、章を分けて、墓制の選択に加わる要素と家族がもつ

メンタリティの関係性を検証している。

それらをまとめると、継承意識には男女差が見られるものの、新しい墓制が急激に普及するような事態を予測するのは困難であり、そうした墓制と呼応しあうようなメンタリティも多くの人々には浸透していない。先祖が何代前までを指すかはともかくとして、墓は「先祖を想う場所」であり、「自分が眠る場所」より高い数値を占め、形態としては、一般的な家族墓を望んでいる。継承が実現可能か否かは、直系／非直系よりも、子ども数と性別に依拠する。「少産少死」の第一世代を「直系制家族との葛藤を孕む世代」、第二世代を「直系制家族との訣別を秘めた世代」とし、世代のメンタリティと関連づけながら検討していかなければ、墓制の変遷について真実の姿をとらえることはできない、とする。

調査地域は名古屋市と東海 3 県に集中した。家族パターンの地域分類における「中央日本」に対応しているとするが、北陸・東山も視界に入れ、分析においては当該地域独特の習俗をも踏まえる必要がある。直系家族制とすべき「直系制家族」の用い方も気になるところである。しかし、マスコミが報道するほど墓制観は変わっていないとする調査結果は興味深い。紙幅の関係で逐一紹介できないが、「多産少死」世代の孫となる大学 1 年生には、継承を長男だけに託すのではなく、子どもたちが協力して可能にしようとするメンタリティも見られ、現代家族の墓制観に関心のある方には一読をお奨めしたい。墓制の変化から現代家族の変容を研究する最大の強みは、戦後の核家族研究にとって最も重要になる直系制家族のメンタリティの残存状況を立ち入って検討できる点に存す、という著者の今後の研究が楽しみである。

かなざわ よしこ：千葉大学